

韃靼勝敗記

五

184

~ 13
4047
5



184
395
三四五



韃靼勝敗記卷之五

○卓毅得款討希寧古塔落城の事

叔も火卓とんとおのの逃るどかんと大に怒りその是比真
末練の腰板め多手伝進とて実費りまら捨の柄
のま中丁と打切板捨て半丁ごりも巨寇一に初めの
海疾又目も暗とん々別と極まともそ伝手亦は例に
を全効かりりる事たしく先ふ後者の身宅ふ進ゆりは
と昔より一うの嫡子卓毅得とて父と受より傳代の命を
百連韃韃天をりよけ西へ来り一よ子故の進去り終るれ
ハ奈何ともとて中うさくよ負の父と母抱一別志の

分類 D63
番号 12
通番 345



きつめと合あつるは親子の恨の切ざらふや僅うふ細く服と
用と熱なる者うて至りし時款の墨更菜のろりと品
一帯と名ゆて藤海那のろ場の露と消えたり草穀得
くんとと己更更菜ををくひ初ト返付て只一付と付
出とを没者の月章引留て血連ひあへし若旦那款と
去りてより時刻後り止の圖書の事うま何とと高ふ
あつや先く親旦那の心死骸を葬りて上母君も若旦那
と死のあやもま加じと海の言葉又泪と押へ父の死骸
と肩あけ弟免とさうて立仰り火葬せんが妻の死骸
まゝ音係いうと行旅よりいづれ父のありさぬ刃るすりも

五ノ一

ちつと計りよる欠一 男と親入の字くも重は極まで
息絶り草穀得くんとをけみ骸を刃る身と向へ己
更更菜の恨令何とと共父の款と母の仇は
と死に付あくと父母の灵魂よと向けをろる慈とを
おと踊りよりく親のぞくまより所より怒まるをい
存る下僕もあつて先は高る父母の死骸と所送り
是後作苦あつてもなく早一回の日もまこれに王君
喇嘛らまふ父の横死母の殉死と白地不吉復讐のお
に我が方の胸を刺ひまれば喇嘛もそそ志をたね
それら起す端して胸をあらりそ屠よく仇と付く

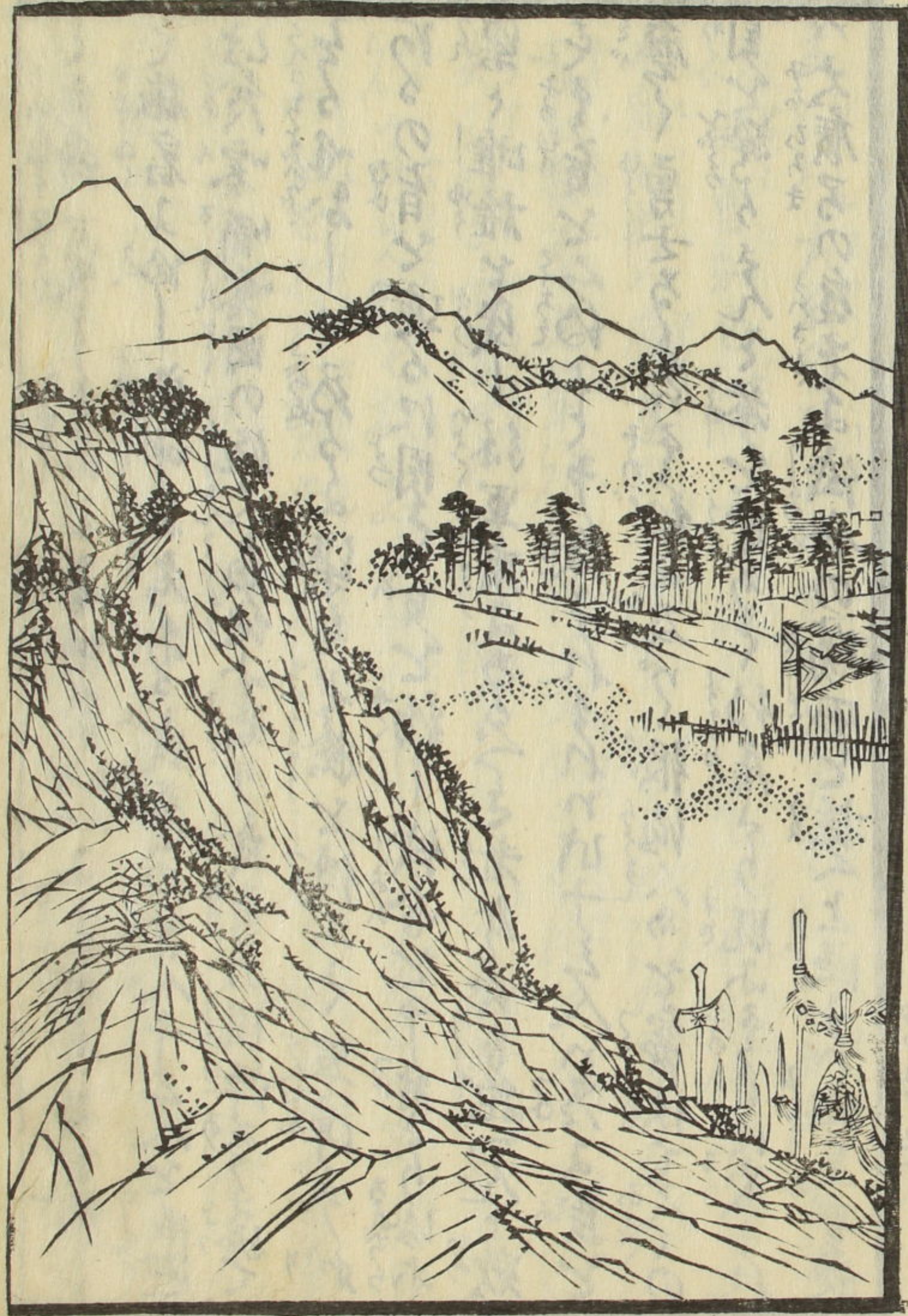
吹り来りてとみえれば身を淋しとて立ち又本國を去り出
たり又善思業の火草を嘗てし十に滅れ割られ
ども十の深疾を嘗て雨浴の事あるまじと然と
暗は八十里程無延てつと思ふととては中花
に若れありと移徙るべし諸國の軍務傳使のたされ
ハ勇士を奉げ用いらるもあせり海あり古塔あり其
の玉縁ありは是より彼より海を渡りて其の
求めん故ある時は去りて其の故郷の慈も後と
独り悲しき日教と積で寧古塔の城下にあり是を
めを隣の人と集め日く其の廣言せしに彼より

タツキノ三

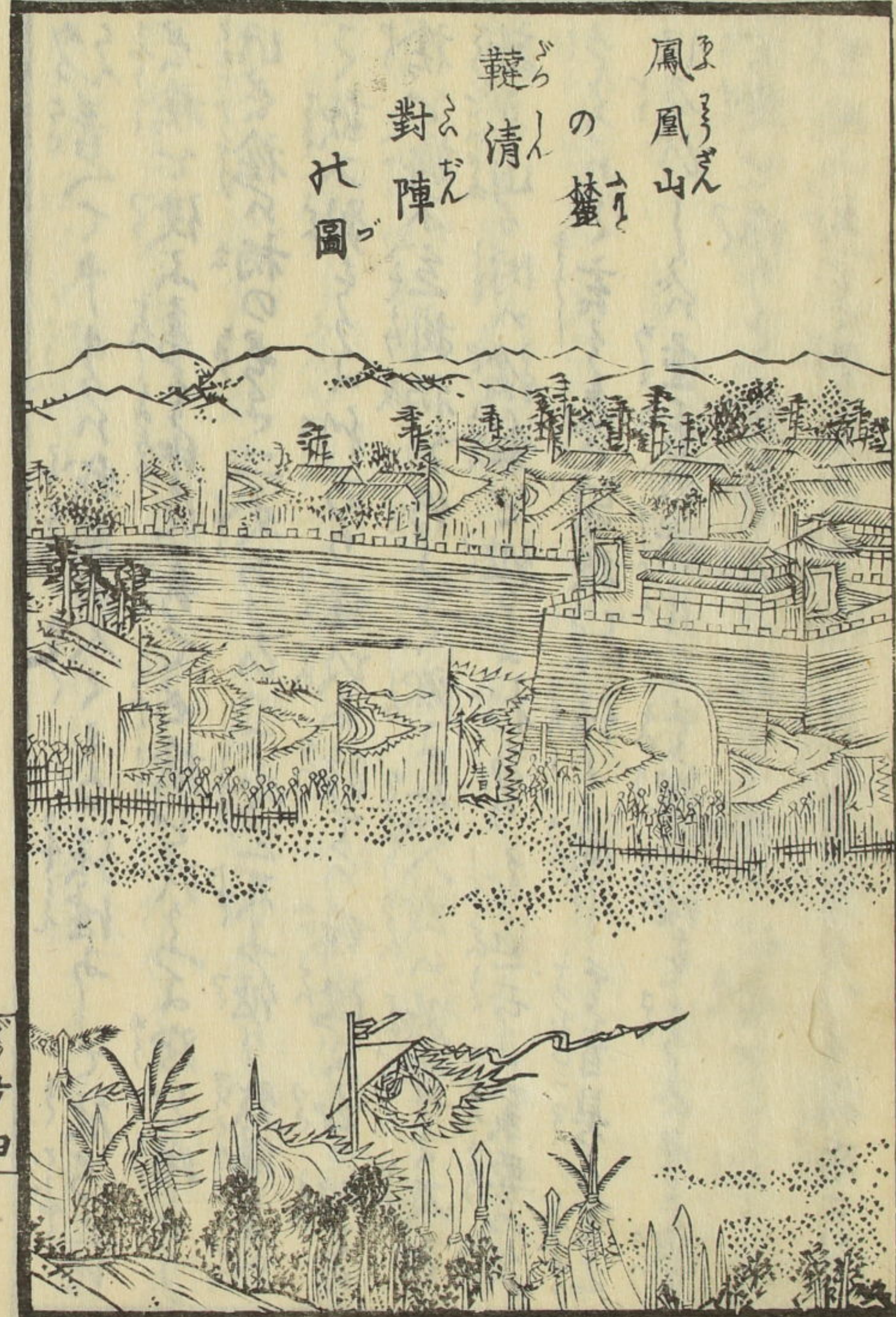
城主の上は又其の城にありて其の武藝を減しと石抱へん
とて使と心と城の中にあり善思業の火草の慈を
亦るまじ一強りも及ぶに城の中に伴るるまじれば執柄
崔彦輝は其の案板をとりて其の慈をさすまじら
るは武藝不長なるの旨上は其の慈を今自在せ
原何玉の産する名を何と云いける子細ありて南國は来
るや洋ふ言とせしとみえれば善思業の善へてそれ人
支那韃靼の内喀喇喀の産する名と善思業の善と
知事より武藝と好む成長して喀喇喀及び昔古を
經歷し武藝力量と依りて其の善と務りて是に依り

藝古今と敵の小世礼まててそち長勇士ハ敵の是我
 洲義力量人又揚つとりふとも事うさう功と影るは子能
 ち及今中華に名礼記り北系うの勇士と名あふのに風
 取り思義するは我懐懐懐と少系とハ里程の遠らる
 整えんども元末少系に属するの國ちまはけ修又枵果ん
 よりけ必と去て中華に赴き少系帝に服初一武名と
 ちむに敵り一名を後世小世礼えんかどと名いさぬくと
 修くけ城に来り一と已が悪と押色と城一かり
 越々まはは採てんそ志と感一再びあひさるは風替り
 に體のまこと強歴一何ぞ珍一き昔剛ありやと墨奥蘭

ろる蓋て中多る我國の人くも強健ありて能く
 長槍と使ふ事多し中ハ長て長槍と使うは少と得たり
 け長槍の柄の長二丈ありハ二丈三尺少なり戰場に出
 る敵不對きり利あり城攻ふ能てハ城渡さむる時この
 槍と據ふ立掛柄と修くハ敵ハ衆ハ或ハ敗軍又及ぶ
 敵追ふ因ハ槍愈と修りハ利ありを修くハ緊要の兵
 かさりと云々まはは採てん積く威ドそ旨具は言と
 に及びハハ並盾の諸盾もそ理不依はちハハハハハハ
 古槍と修りハハ武藝ハハハハハハハハハハハハハハハハ
 軍用小立ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ



鳳凰山
の
麓
の
陣
對
此
圖



多
寺
四

と前陣へ交しし由と墨見蘭らの不意會あり日と約し
て後宿又仰し敵中よりある武藝の名人十二人と匠出
け夜々囁囁四の浪人由他子来り武勇の風評ありて
とる味かしてありし梁とを捨と使ふと軍陣不利
あるの旨と速るに因り日と約し試合と申すなり後ホ
梁と唯権と交し練軍用なるべし者なるは巨魁一人と款
をそ首とらぬと申す後されれば十二人ハ者も武と
磨く勇士と云ふも及ぶ彼浪人のと密依て入るの
目と送りんと拳と使わくは居たり既ふそ自に敵を
バ大廣るの座をよ試合の場をと獲へ上はるは誠至豊親

五五五

王の大右の座と小執柄崔彦輝の刑部某抜
て同曹知白のホと始めとて諸臣お法お察志
を報と打バ廣るの双方よりをいひはのりて武札
を交し墨墨見葉の彼二丈竹のを捨と自らも
突をむと密囁囁人の強健なる人なるは務は墨見蘭
めりか強先何ぞ款とを乞ふと十二人の勇士と突破り
け付延と打バ双方より武札して引延く試合終て墨見
蘭らと沛おに互に互と下さる今より汝を巨魁一人
を勅とて一隊中の若者も七捨の指南役とて一隊
後さき打負る十二人ハも互と下され必を去恨と會

むす方りきとあつれは雲見業らんちと十又細ひを
かく以受中て互さうろが不自し七激門は於て一箇の
第宅を獨り交より門人目くれ坊一長くに青蓮し
寧古塔城中に威と振ひるる却復復讐言のあふ客爾
客爾と之也一草殺得まらんと年未ど十六歳られども
仇と付く父母の冥魂よも向多るる怒ととあせんと一心
と激し或時ハ遊人の体又安んぬと荒小色とあるひハ商
人のまねとほし野又伏し山又禁て國々の激下ハ勿論人
家母と山里と子とつりて是もけは寧古塔小来りけ府
三七峰とつりて先まき客爾客爾の浪人を抱へらまると

五ノ六

長槍と指南するの由も風評しこれ何れを耳寄の事
方りを考て頼んと種くはんと碑けともをともも
もうくて目と見る所はけは鞋紐より軍起り黒龍艾丹
のあ流と攻落し脱しけ寧古塔又素素の由もて
中の騒動大方なるは水糸ハ援兵と乞ひ又軍役の人
あハ町人百姓と携まり而くに役所と建て十五又より
十又との者とあつるの地波中しこれハ是屈免の折くと
彼復訪るなり所なきは夜の旨知ひこれハ子事許容
ありと激門の人長小屋に入垂る交り於て目く客子と
頼へども雲見業らんちの大身とつり客爾客爾とつり

るもと得ざりに種絶勢既不攻を討つ依く軍師ひま
ちく墨見蘭も一子のおくおとちり歩後と指
ま如く不忠強をうる草毅得と墨見葉
も不属して歩後と勤む心は是と忍まば終つ方
又の仇ちまひ飛掛つて一討と押入るも早く役
いまでを奪ふと能ひは仇と傍に並たつ無急の時日
と送りくる不忠と出て子三年の星雲と煙く十九
ありりもろく艱難小老頼も後り果されば墨見葉
と旧徴人と墨ども女もも付るくは使ひくあや
うりくるは方なりまの園と案囃囃王の軍師の

麻練按見と共は備つて諸方と切込へ既し小京乃
咽首と徳む艾丹と攻落し勝ひ傍く破州の如く是
より寧古様と攻んと軍強あるは法王噯喇喇麻
席とをそと奪てより我も勢今も功を建てるは
如くは寧古様の城攻を素が一は小信甘く長くと清
まうれば案囃囃王も是と承諾しそ育の艾丹
小なると是を切込へ一はのゆくと梅育一は北系
の後徳と防ごる噯喇喇麻らまの我信下の焉斯坦
とんと軍師とてそ勢七万旅務と引率一日と
寧古様のは方鳳凰山の麓とく押引陣と布て

ふお見と申し地理及び款の要害と懸けしりる軍古
備る軍務多しと雖も要害の地ふあはんと昔一六
軍師為斯坦とて再々自ら聖く地理戰場の傍地と巡
見し陣ふゆり唯唯喇嘛らまのおまおまお見の
者より海へくく軍古備る軍務多し昔も天山
に足ゆきども要害の地ふあはれ唯方鳳凰山の支極
登り船下は城と見し大煩とゆへ款をく懸けし一國
打放し多あくを討つ唯方の換亡くし後喇嘛ひ
る一款又城中にまく出でし唯を以てし假令要
害完くぬ平城といつとも軍務多し多れば士卒の換

百五十八

亡多くしそをあらは深き一統し七日と延さる小糸の
援後後より暮り唯方いよく難者あらる一若鳳凰山
の支極と款とあり唯方いよく難者あらる一若鳳凰山
と敵て一大りの場あり軍の傍敗け一舉ふあり然るに
終く款と懐くを盡てすく鳳凰山の支極とあらるに
お速まひ唯唯喇嘛らまと始の皆く為斯坦とて
案と威しそを又同じ軍古備城中心へ書とるを
文と白く

奉

我國属 貴國久而無別心 今帝乱政欽差諸大臣者

怠其職虐民暴惡增長而遠及我國下民不免餓死乎怨
今帝如報仇 帝則齊殷紂王欽差大臣亦似秦趙高輩天
命有限太清已為滅因之天降生民討之而令救民之塗炭
生民則我也貴王等屬其幕下受天討者盲蹙之如向猛火
我焉不傷之哉早離心來于我陣立降可全一命兵替首

癸丑立復

嗟喇喇嘛

と恐り別勇捨き一者と携え半か中くはけしと
書と後せば後き一書より勝僅二十騎より馬は降り寧
古埃派へ迎ふる大士の櫓より是と刃とく大は怪しと故僅
二十騎よりりりそ能ある大煩より打殺し中とさる

五ノ九

本丸へ侍へられ執柄崔彦輝 け侍と成て故僅
二十騎より南條へ馳来り必も子細わらん子細も同
ど裡不辱ふ打殺さる義勇らとと似く却る故又矢の
ん先づ櫓より事の由と尋と下知をまば中ぐらの獲る
用と形のま出く子細と問ふ喇嘛らの使者きて
我ハ嗟喇喇嘛より南條へ一太刀と申へき使者中
て別去孫ともお系せり王のおよるまらるる要命やとん
とゆりりる又け首崔彦輝へ侍ふ崔彦輝
皆くと唯一何より子細と尋ひて後ら奪わるとけ
先本丸へ急ぎと下知をまば休門と開く審門を本丸

よの難能人の勇豪と挫げんと上座の豊親王
央の雀彦輝と姑の栄枝曹如自
して叔千の勇士大廣より極例の奇羅星の如
くお信武威と強く訪ぬる喇嘛の使者に
ありく諸位の中を打返り雀彦輝の
座より雀彦輝首して中座喇嘛ら
に合併して義兵を起し支那難能
兼ども南嶺の右清の奇羅星の地
付んとと糾致し則ち書を送ると
と受取り用として又僕とより主將豊親王

百五十九

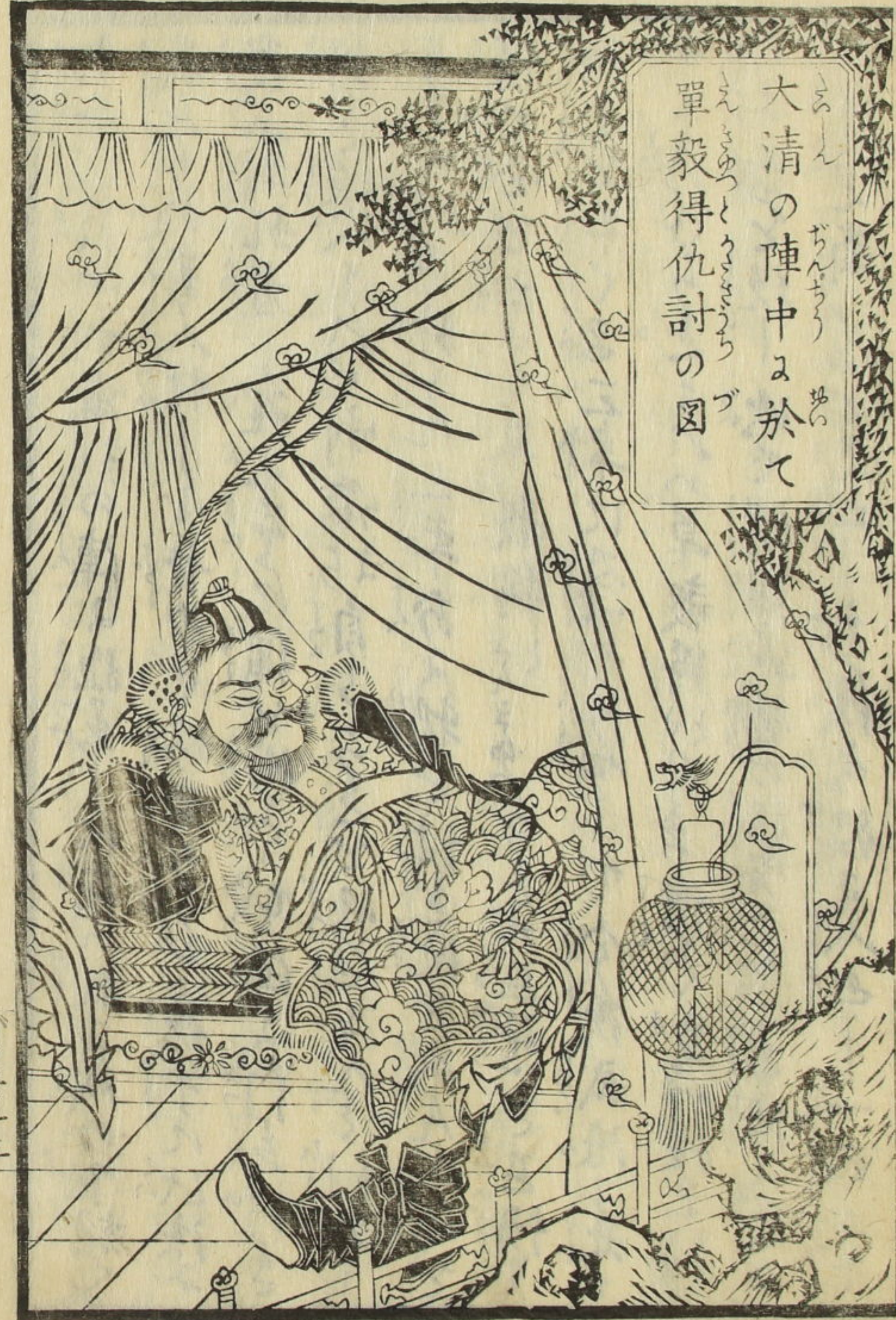
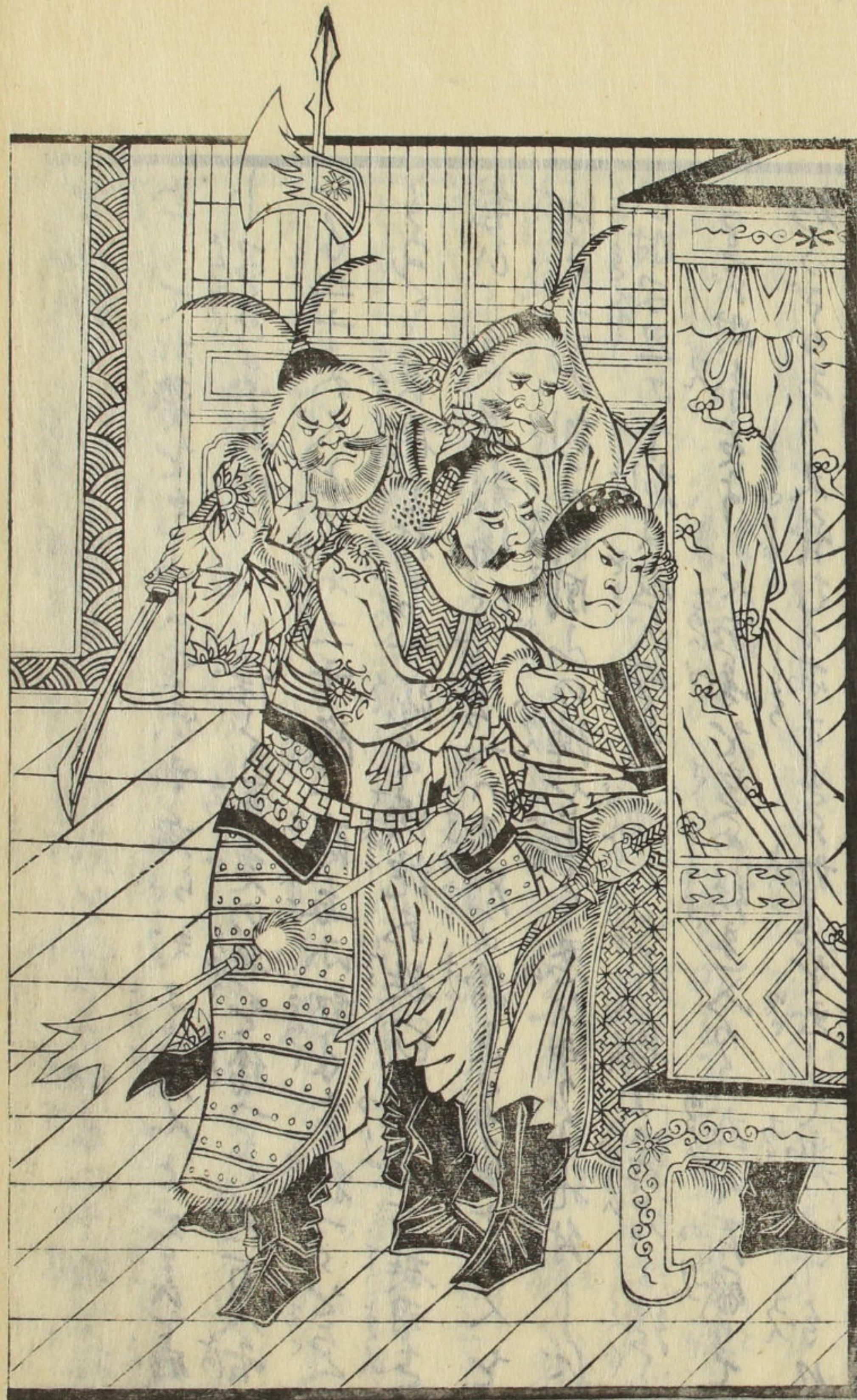
忽ち氣きと愛し小秋の寇賊累代の原悪と
欲するのそちを空王の威豊と
と喇嘛をその書と送る素奇怪なり
不降る憎まは憎む喇嘛防王
合戦不呂一擲し踏法し異んは
居文さるちりて怒りあり使者
たもめんとんと然然さ少くも怖
と之をく陣屋より唯唯喇嘛ら
言とままの馬斯坦君あま
不悦び陣屋よりよく風凰山の支

に下知して押せし又城中の使者と臣命一歩軍機
 とらふ曹如白くくやうの高地を要害の地と爲す
 鳳凰山の支那をくく故海と服下に見下して合戦す
 務利疑ひはし先づる時へ人と制し後々時へ人又制す
 るといは一戦の緊要なりとん芽てまゐるが皆く是と同
 出陣の羽をとりて軍百官の刻に城とわりのふ
 捧ぐ鳳凰山の麓より山とて見とまは款いふ山とて元
 冷より執柄雀彦輝とて是とて是とては後とて
 く去るなりと地不案門の礎礎塔宮しく保く臣命せ
 と名は勢とてよふ分け一歩は案板とて二万餘騎一歩と

曹如白くく二万餘騎雀彦輝とて是とて是とては後とて
 後へく正面より向ひは案板とて曹如白くくはた
 ころま山の三方より討く樹る礎の軍師馬斯坦とて是と
 是とてスリヤ款の隊と出てまゐるぞ大煩と打樹とて数千
 の大砲と打樹とて是とて是とて是とて是とて是とて
 率ともせむ半皮の指とて是とて是とて是とて是とて
 さぬと打樹く我々うらなはは砲隊と時後り目色ふまを
 若も快く是とて野陣と張る者の給へんと是とて是とて
 陣中の急務と許さるるなりと大おより陣と切らるる
 用心最重也礎礎勢も算と焚て用は是のありる

け付異業業めも一玉のねりて雀彦輝さへんが先陣小
属一卓殺得とんまらも後ひ来り平た小父母の仇業鬼
業めと付んと付込へどもあまもつるどくを奪てと能
りされが危やせん角やと目疾心と苦一ひるおろく吉室の
嘘嘘喇嘛らまけ小押あつと受て門ん丈又軟び居る
あまあうさのきけ陣小後ひ来るも是天のちるあかり
我け陣と後出と喇嘛らの陣小取け卦と侮へ加給と
乞て業鬼業めと付ち終ぐけ敵名と巨敵さへお存の
二を全ふさるの功是より大なるはとんと受て一由改
と見合せ切ふ二十枚と百一赴とを盗と陣とゆけ出るよ

打乗一抜小喇嘛らの陣又強忍に疾の既又成の下刻之
夜更りの美人怪しき昔めく何者うらど疾中け陣小
衆ふ羽孔者と短不そに縄と掛く本陣又引はれと
仍と侮へまらば喇嘛ら自らちまを吹味とんと引本
うらまらどけけん三年あ又軟と討是仇と存んと何と
情て玉と出さる卓殺得とんまらあまは且務と引行り
汝玉と出さる三年に及びり何して今疾我陣と奪
中くあまらとまらば卓殺得とんまら謹ぐ先づ法主
の安泰を祝一次に諸國遍歴の法要よりあ地又来り
仇業鬼業めと見出さる後今殺入也一五二



大清の陣中^{ちんちゆう}に於^おて
單^{たん}毅^い得^{とく}仇^う討^{うち}の^つ図^ず

と河經くわけい、浮うきく言ことと一ひと我われ不ま存ぞと信まと切きと二十ふた枚まいと指さし
 中なかにて加勢かせいと乞こふ又また嘘うそ味あじ喇ら麻まらままを考かんんととちと威い
 ト子こ逆さか馬ま斯し坦たんとと信まと居ゐ亮りやうの長ながを務たづつと又また百人ひゃくにん名な
 一ひと二十ふた人にんと定さだめ二十ふた隊たい一ひと隊たい毎まい小せう切きを殺ころつととち
 ともく長なが槍やりとち一ひと隊たいの旗はたを扱とつと都みやこ合あひ百ひゃく挺たい用もち
 勢せいひ一ひとと單たん毅ぎ得とくととち一ひと又また別べつの務たづまる勇ゆう士し人にんを
 信まと子この刻くと風ふう風ふう山さんの陣じんととち恐おそび中なかに又また地ち射せに
 け付けつ子こ丑うしの刻くと及およぶぬまの陣じんとち兵へいの箭や火かも終しゆ
 ちと付つ分ぶんとち一ひととちお果はと定さだめ筋すぢを入いり又また成なりる居ゐ張はりりて
 知しらざるあり又また信まむるあり又また切きととち欺あやまさ十分じふぶんれ

名五十四

子こ紀きり單たん毅ぎ得とくととち一ひとも元もとの陣じんへゆり松まつ子こと親おやふり
 墨すみ見み葉はららん元もと来きた匹ひつ丈ぢやうの勇ゆうに猛まうるのとち軍ぐんを又また保たもつ
 のゆへたのどく平へい槍やりととち勢せいと痛いたまりおをめけらるらる
 後のち平へい准しゆんる虚まよととち一ひと墨すみ見み葉はららんが一ひとの皆みなく熟じゆく打うち
 附つて信まむる者ものもあつとち一ひと單たん毅ぎ得とくととち一ひと人にんの勇ゆう士しと
 とち一ひとをととち一ひと墨すみ見み葉はららんととち一ひと考かんて單たん毅ぎ得とくととち一ひと
 大だい音おんととち一ひと墨すみ見み葉はららんを結よく水みづのき我われととち一ひと汝なんぢがみり
 横よこ死しととち一ひと火か單たん毅ぎ得とくととち一ひと務たづ單たん毅ぎ得とくととち一ひと也なり又また横よこ死し
 の時ときは母ははいそ別わかれととち一ひとを傷やうして自まづら痛いたまて死しと
 まへととち一ひと汝なんぢを信まむととち一ひと汝なんぢと利きとけ我われととち一ひとと

源のあつても子三年より年一の優曇花のさるる今宵の
世に親をせし名を掛まはる見業らんを怖り推
系より青二女と云ふ世の危きも及たは城あり者共出
合と大言の罵りつて枕元なる刃と九只一打と切符を
ころころは恨のあま双撥潜り又打合と一と一火花
と散り飛ぶは早殺得とんまらんの程く地へども危き務
ま一善見業らんが本事に敵一がく女一落しとあり
て既又危うく刃くろふは又射流素りし五人の勇士横合の
ゆきの一善見業らんが右左の統と打落とんあも釘費
のどくろく敵く働くとんはは勇士多る早殺得とんまらんに

女五十五

ふして父母の仇ありあるませうまよと侍不区とれゆと
ハ早殺得とんまらんの程く女一落しとあり
の肩より右の肋へ切りまはると計りし例まらり危き刃は
首打落とらうにあら陣へ懸入る二十隊の人々時
統へより百挺の鉄炮と登り懸周と仰りしはけ音は
陣思ひよりさるるまらんと上と下へと騒がさ振振とるあを
平生又別する長槍とみ返して突きく絶する崖彦輝ん
まが本陣より是とぞ射つて松明と照し故ひ来り味方
と励まし入替つて戦いんとすまらぬ味方振振へて騒
まらるけ不敵討つて敵はさるる味方とるるは戦ふ

御もあつりたる却役鳳凰山の陣より草殺得と
へり多々喧嘩喇嘛らま軍師馬斯坦らんと計く夜討の
人数と出りきり泣きて馬斯坦ら喧嘩まら不苦と
この年の幸ありて夜討をとりども我の更なり款の石を
と討て一旦の突崩とも味方お勢加に取明て款討候
へともま人も生とゆりゆりまほまれば夜の暗さる
惠軍とゆく款の用章の所と討て一時又寧古塔城と夜
くろく難へはしとちりまらばけをとりと「事又惠軍と下
知しと押出候既して款討をく相参る時ハ本陣より
をり款陣と親ふに雀彦輝さ本陣より救ひあり

て彼とまんとまらお柄ちまらば時分ハうけ途と介する
巻まくと去報と打く下知まらば惠軍一同又関と依り
狭砲と打掛を二を三小攻付まらば城を倍く作天一惠軍と
取て進出を子夜も明後まらば城お雀彦輝さいえん大耳
怒りまらば味方の形勢ゆるま丸み成て款と破れ死を
ともまらばゆりゆり血脈よ成く下知とをたをを地り
客の多て是れ一を二を惜む客の多てまらば海僅七八ふ
丸はゆへ群る難勢の中へ突入く西も振む血戦一ゆり
乱軍の中に討死しまらば馬斯坦らん採配お振げ産
お糸して城と築くと烈しく下知まらば勇とまらば難

經路擗ぐ擗ぐ城を經府要害なる平塚と十重二十重
に兵圍む變く智と命を改まる城不強り軍兵共ら
兵ひ出人もなきらんが今の討死と先給を爲め天王
のわん限り戦ふく快く死んとて四方の檣を兵より練絶
大筒とお出せども亦も目より大軍を兵を事とも
せむと擗ぐと樹葉入り城兵を兵を事とも
より度と冷と切流ぶを擗ぐ不豊親王
と方のちよぬらさぬ系さして爲め兵難の惣勢ゆぐに
兵入るれば城兵今も是と我一は討死を馬斯坦ら下知
して兵とぬめ門くと堅めさせせぬへ子擗ぐ僅不引連く

城を巡りて迎渡る者と善く搜一か豊親王
と兵よ未むむむと先も爲めあひ討らむと捕あつて兵
ひかりるる又女童の芳りて城兵く送り平一城へ入る
階り一は嘘嘘喇嘛らまを丸入る一は女卒の功と
兵を擗ぐ中にも卓穀得とんまをぬ出さるる一は款墨児蘭
が首を擗ぐへつて兵の又ぬく體首をけ討喇嘛ら卓穀得
とんまを擗ぐとんまは汝弱年らるる孝人と金銀より擗ぐ
て数年の艱難と歷く父母の仇と討く孝意のもを
一ニつうの款陣のよ引して兵と一是は依て我軍不
兵よ擗ぐを得る老孝もよ金よさるる古今に希る

若者うらと比威下比美一以立と下さ馬知ると賜り
 一万のおと定め若士と毒のおりと許けらまけし程も
 大を急ぐこと勿き又仇墨兎蘭の首の汝を殺せり
 其計へて下さるれば早殺得ん事あり厚君身に餘り
 威威袖と浸し兎角の比受もやゆき辱く謝して我お
 比と比と死下の多実ある者と撰て出し墨兎葉の首
 と持を本必ふ送る父母の漬墓又ゆへしむ嗚呼者ある
 ありあり蓮の泥の中に生く泥を深ぞ早殺得ん事あり
 小狀強暴の中に生くれども古賢人のまじやうの忠孝
 其ま令ふせし比ひ希なる若者也 韃靼勝敗記 終

四二六

附録 ○ 韃靼勢天徳帝に一味合伴の事
 噠頼喇嘛より寧古塔落城の計と急使を以て艾丹
 に在陣の喀爾喀王の陣に告ぐ續て韃靼勢寧
 古塔小會し城中に入しけ度噠頼喇嘛の早
 事ある大功と感稱し次小馬斯坦の智謀と美義
 を亦早殺得ん事ありの若幸ありて忠孝を勸えけ及の
 物也一ありて數くの引もおと威状と居く賜りし余
 諸軍の軍功の漬海より或ハ馬鞍武器珠器絹布木
 とらへその上大宴と催し上下數月の軍勢と休め翌日
 大廣回小諸將と集め軍の意見と向ふは若を去りてこの

撥ひは案ト若林遼東を以て内地不攻入天下一統の功
とる一あくと衆は同音にお賜の時又麻辣抜鬼を馬駒垣
うその友人最も静言案を抄く味方教月うさるる新屋
中と平香うさるるの諸氏の大清の苛政を悪そ士の君
の義名を責し付ば務ら後清り幕本の風を靡く如
くに撥ひ又いつ夜のごとく思ひあつて幸ひあつてその新のじ
今内地より後明の天徳帝は民のかと勝る智勇
の士教多是と補佐を且大清も亦儒代勇功の忠臣多
うさるる一たある時いつ何と付とも中く今との軍の事
変り一較てうさるる務利是案は一敗敗る時いつ是との

戦功水の泡とちり却て世のお笑ひとあらるべし先史より
南多へ侵と純天徳帝は一味合作の書を送り
ハ彼らうさるる水徳一我軍の合伴せしと表し軍威倍々
盛りて北系を討ん事かせり大清あはけ糧款を請は
らんぞけ方へ軍馬と出さの海あらんやその内君に改を
布き民と極育し士卒を個練し長根矢玉を貯へ振を
固くして時を待ち愈後明恢復の大事成終せし後
小隊の支那種紐一糸を以て天命を安んじあへ二虎相
争とさるる一虎は倒し一虎は傷く發もあはれ皆く南北
戦闘の害子と観ひ海あはれさるる虚はあり個練の大軍

と率て内地不攻入奉を率て一人と其支端と云々
 言吉流水のどく一息のよどきもななく速くは響爾響
 主と始り喧嘩刺刺らまを傳はるの法はあつと
 けり又感嘆の智者いひも止りり即時又去籍と
 便ちるは然と忠使を以て南多又云々いむ使者南多
 に至り天徳帝いふ一味同心の書を献る天徳帝
 も前書と名し傳宣の上承儀の色紙と認め難粗の使者
 といぬの黄金と賜り別使と傳へ寧古塔人と云々
 難粗勝敗記附録終

